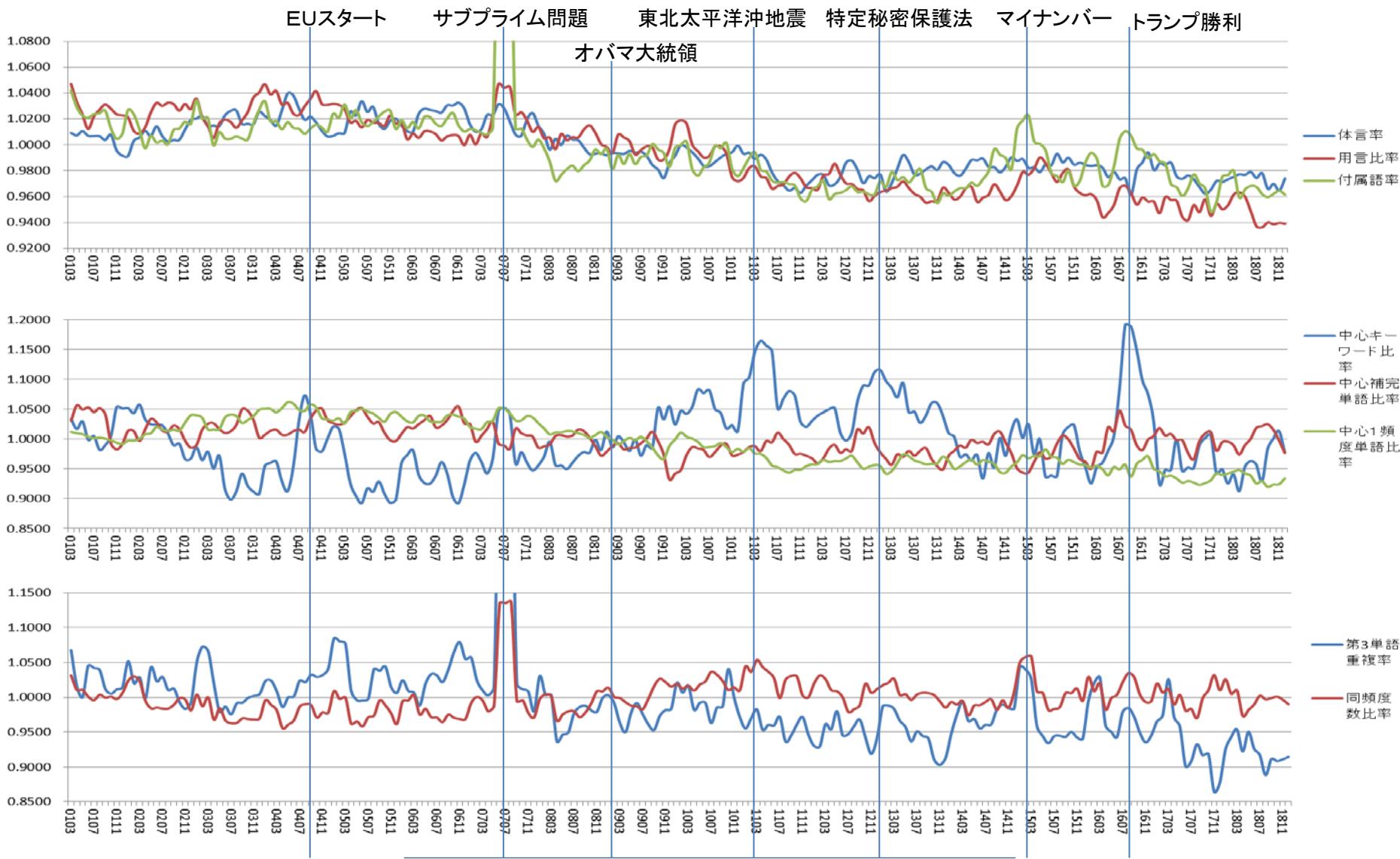


18年間の全国紙社説表現変化を追う

訓練され、洗練された匠な文章も、社会の大きな動きには、思考＆表現構造に変化が生じる。

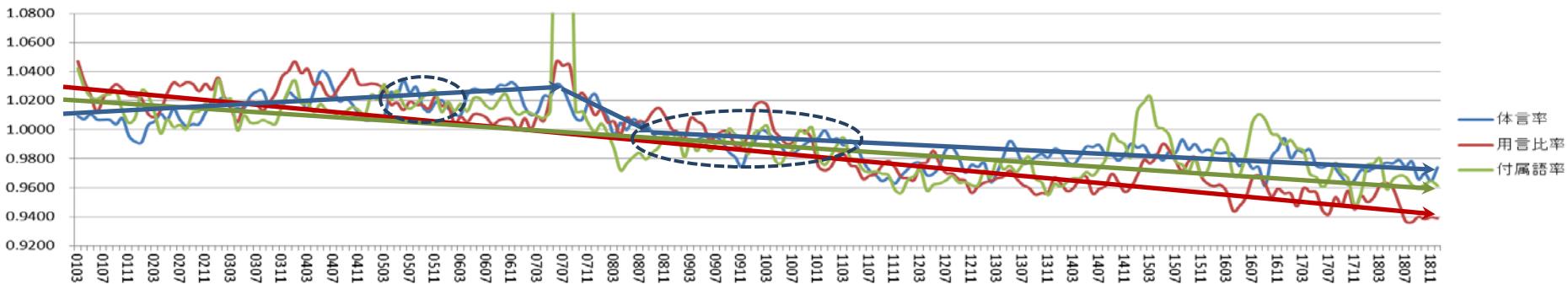


18年間での表現 & 思考形態変化-1

社説グラフの説明

- ◇前ページからのグラフは、2001年1月から2018年12月までの全国紙(朝日、産経、日経、毎日、読売)の社説を1ヶ月単位で分析した結果を表している。
- ◇全国紙は5紙で1ヶ月に280社説程が掲載されている。18年間で約6万件の社説量だ。社説の文字数は700字から1800字あり、文章の長短は様々である。タイトルも異なるし、使われている単語数、単語の種類も違う。「国」「国家」「国全体」など、「国」を表す1単語の文字数も違う。異なる内容、単語、1センテンスの構成の違いなどを超えて相互比較できるようにしたのが分析値である。
- ◇分析値を求めるために、品詞分解をし、品詞数、単語数、単語種類数、単語単位での頻度数、センテンス数、1単語の平均文字数などを計算する。異なる文章間での基準となる母数を導きだし、母数に基づいての比率を計算する。その比率を平均値±標準偏差を除いた第2の平均値を求め、分析値を求めるための乗数を導き出した。グラフは、その乗数値である。
- ◇18年×12ヶ月(216ヶ月)の平均を1.0にして、表したグラフである。熟練された280件の文章の平均なので、全ての乗数値が1.0の近辺に集まるのが論理上適切なはずである。
- ◇文章分析で求めている分析値は35種類あり、その中で、正規分布を作りやすい分析値が16種類ある。
<体言率、用言率、付属語率><テーマ設定力、テーマ説明力、テーマ補足力><文章整備力、単語構成力><センテンス構成力、センテンス主張力、行動表現力><第三単語重複率、同頻度比率><主張力、主張補足力、論理強制力>である。母数と対象とされた項目の計算方法が同種類であるものをくくっている。この中から変化の現れやすい3組を取り出した。

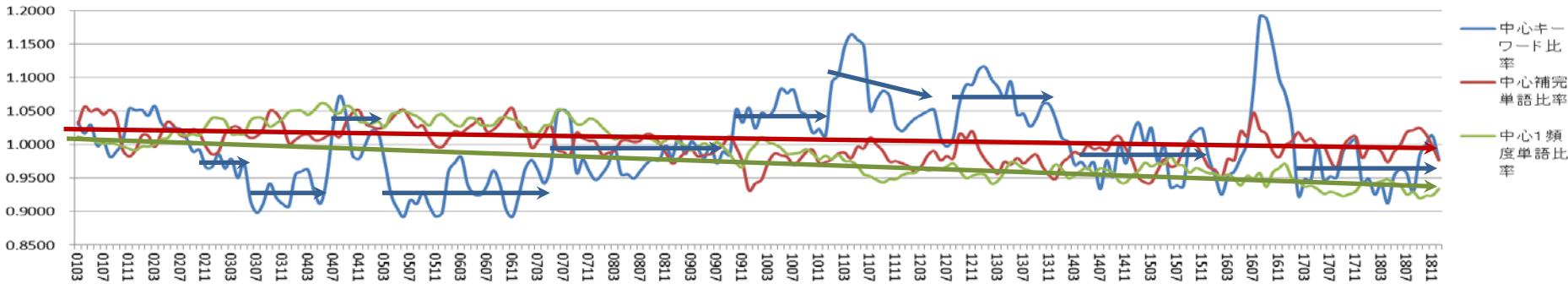
<体言率、用言率、付属語率>の18年間



- ◇文章を品詞で分解すると、大分類では、体言、用言、付属語の3つに分類される。中分類で、10品詞程度、小分類では65程度になる。分類数で程度としたのは学派によって分類の仕方が違うからである。
- ◇グラフに変化の傾向を表した実線を重ねた。破線で囲った所は、3つの値が重なっているところだ。3つの値が重なるのは、表現 & 思考形態のバランスが整っていることを示す。破線で囲まれた所は2ヶ所あるが、後の2008年から2010年は乗数値が1.0の範囲にあり、表現 & 思考の状態が安定していた。
- ◇2003年は3つの実践がクロスしている。2001年では用言率が高く、体言率が低かった。2003年以降体言率と用言率の値が入れ替わった。2001年同時テロがあり、国内でリストラが落ち着いていたが、再びリストラが始まり、2003年頃に落ち着いた。体言率の乗数値は上昇するが、2007年から急に下降した。3つの乗数値も下降し続けている。2000年頃と比べると、平仮名、カタカナが多く使われるようになり、1単語の平均文字数が多くなっている。
- ◇2010年頃、社説表現を簡単にしようと全国紙で調整が行われた。1文章で使われる単語量が減り、意味の掘り下げに拘らなくなつたのかもしれない。

18年間での表現 & 思考形態変化-2

<テーマ設定力、テーマ説明力、テーマ補足力>の18年間

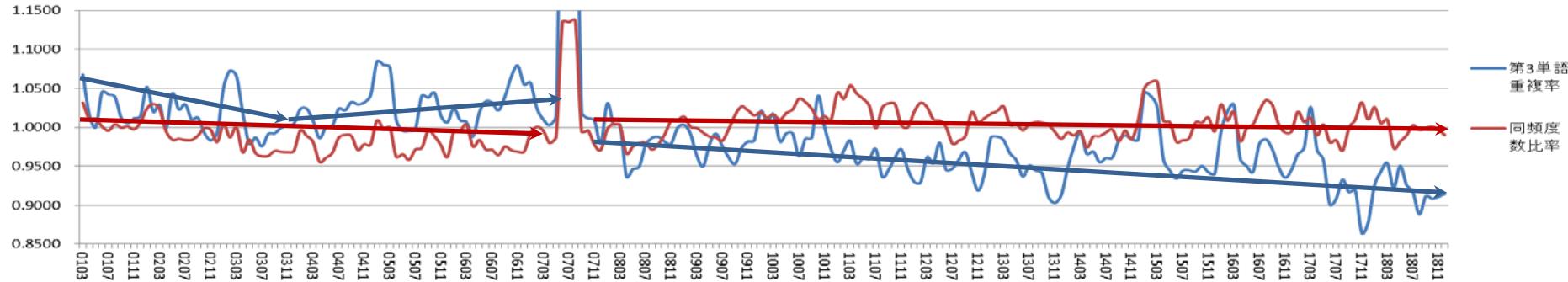


◇論旨展開の状態を表す単語群を3つに区分した。論旨の中心となる単語群がキーワード群、これを補足する単語群が補完単語群、文章全体のイメージを作り出すのが1頻度単語群である。キーワード群、補完単語群は文章全体で使われる単語群の20%程度しかなく、1回しか使われない単語群が全体の80%を占める。主張の中心になっているのが、キーワード群である。全体の5%の単語である。

◇補完単語群の乗数はほぼ1.0近辺にあり、一定した値を18年間維持している。主張内容を補足する論理的条件の整理が十分で常に安定している。卓越された文章であると示している。1頻度単語群の比率は徐々に下がっている。論旨の結論への性急さが表れている。

◇キーワード群の乗数値は18年間に何度も変化している。社会の状況に応じて、解釈、問題提示、提案等々が行われている。キーワード群は、課題に対する要素の量を示す。1.0以下の場合は、命題の構成条件を単純にし、1.0以上の場合は、構成が複雑化している。

<第三単語重複率、同頻度比率>の18年間



◇第三単語重複率、同頻度比率はともに同じ頻度数を示した単語群の階層を表す。第三単語比率は、一番多い単語群から第三単語群までの単語総数を計算している。同頻度比率は1文章での同頻度の階層数を表している。階層数が多くなると、論旨展開に丁寧さが現れるが、丁寧すぎると間延びし、余分な状況が入るようになる。短すぎると読者の状況イメージを阻害する。

◇同頻度比率が2007年を境にして異なるが共に一定の範囲内で安定している。文章の論旨展開の匠さを表している。

◇第三単語比率は、2003年を境にして、下降から上昇に転じ、2007年に急激に落ち、その後、下降をし続けている。テーマの中心となる単語群が減るのは、問題または課題提示の要素が単純化していると示す。